

■会議結果報告書■

会議名称	第7期札幌市子どもの権利委員会 第5回委員会
日 時	令和6年9月12日(木)18:00～20:00
場 所	TKPガーデンシティ札幌駅前 カンファレンスルーム2A
出席委員	12名出席/14名中

議題等	概要
議題1:(仮称)第4次子どもの権利に関する推進計画素案について	【事務局説明】 ・以下の資料に沿って説明。 《資料1》(仮称)第4次札幌市子どもの権利に関する推進計画素案概要 《資料2》(仮称)第4次札幌市子どもの権利に関する推進計画素案 【主な質問・意見】◇委員 ◆事務局 《計画素案全体について》 ◇資料2P5の第3次計画取組結果に実施内容だけでなく、課題も書いた方が丁寧ではないか。 ◇自分のことが好きという割合が低下している一方、毎日が充実していて楽しいなどの項目は肯定的な割合が高くなっており、矛盾するような結果が出ているが、市はどう分析をしているか。また、相談しても状況が変わらないと思うという数値が高いが、自分のことが好きと何かリンクしているところがあれば教えてほしい。 ◆(石堂子どもの権利推進課長)内閣府でも自己肯定感、自分のことが好きのほか、将来への希望、社会貢献など複数項目で子どもの意識を図っている。自分のことが好きかは、年齢やその時の心の状況などに影響を受けるものであり、今までも多く意見をいただいている。次期プランでは、自分のことが好きかは経年観察していくものの、計画の方向性を踏まえて、成果指標は「自分には様々な可能性があると思う子どもの割合」に変更する。 ◇計画のポイントや進め方が見えづらい印象がある。子どもの意見表明では、子ども自身がどうしたいかという観点でまとめられないといけないのではないか。また、レベルアップ、継続、新規となっているが、予算規模も含めた過去の実績と事業の内容、その成果についての評価がなければ、足りない部分やレベルアップへの意見が言いにくいと思う。 ◇アクションプランには事業の予算規模は掲載されている。 それぞれの事業が、当事者の声が反映されたレベルアップであるかの検証は細かく見ていく必要があると思う。 体験活動は高校生の意見を聞くなど、当事者の視点、当事者の声が盛り込まれた計画を立てていくことが重要である。 ◇学校外の活動は経歴書に書けるような活動は人気が高い。広告のためのイベントなどは高校生の足は向きにくいと感じている。 ◇イベントの運営と仲良くなり、参加することが多く、いろんな人がイベントに行っている印象。土日に遊びに行く感覚でワークショップや職業体験に参加している。 ◇そもそもワークショップなどの情報が届いてこない。職員室前には複数の掲示物があるが見に行くことはなく、そもそも知らない人が多い。また、休日は部活動やテスト勉強などもあり、外の活動まで目を向けられないという人が多い。

- ◇高校生や子どもが来ないと悩んでいるNPO法人や民間企業も多く、イベントを市で拾ってもらい、市が広告を出したらもっと多くの高校生が知り、職業体験する機会が増えるのでは。
- ◇ボランティアのきっかけは何でもよく、やってみた結果、興味がさらに深まるものに一歩進んでいけばよく、知る機会が増える、選択肢がたくさんあるという状況はとてもいいと思う。
- ◇成果指標「自分に様々な可能性があると思う若者の割合は、誤植により削除となったが、若者の数値を削除する理由はなにか。方針3に関連するので削除しない方がよいのではないか。
- ◆(石堂子どもの権利推進課長)子どもの権利に関する推進計画では条例に則り対象を原則18歳未満としているため削除とするが、本書のさっぽろ子ども未来プランでは若者の支援も含めている。
- ◇相談者は上下関係を感じやすく、マイナスワードがあると構えてしまう傾向がある。気軽に相談しやすくなる工夫として、「お話しませんか」など、相談者が決して弱い方ではないということがわかるような周知ができると、相談しやすくなるのではないか。
- ◇顔が見える関係がポイントだと思う。また行政や学校などと離れた相談場所があると良いと思う。
- ◇スクールカウンセラーに相談することが人から浮いてしまうような感覚があり、敷居が高く自主的に行きにくい。教育相談の様に、スクールカウンセラーと一人ずつ必ず話す機会があると相談しやすくなると思う。
- ◇資料2P20の福祉読本について、子どもや女性などには優しさや思いやりを持って接するということは書かれていないが、障がい児、障がい者ではこのワードがたくさん出てくる。障がいは何かということについて社会モデルを含めて、副読本を作ってほしいと思う。障がいがどこにあるのかは、個人の機能障がいにより焦点を当てて、できないからどうするということだけではなく、国連の障がいの定義にも関係性と書いてある。そこに合理的配慮の調整を持って考えてほしい。
- ◇インクルーシブ教育を原則にしないと、特別支援学級との日常的な交流の場や学ぶ機会の充実が進んで行かないのでは。
- ◇学校の授業がきっかけで特別支援学級との交流が盛んになった経験があるので、授業等できっかけをつくってもらえると交流しやすくなると思う。
- ◇思いやりを持った先に行動が生まれると思うので、行動した子どもたちを褒める環境をつくってほしい。失敗しても、うまくいなくても、行動した勇気を褒めることが教育では大切だと思っている。
- ◇子どもコーディネーターは学校とどの程度関わりがあるのか。
- ◆(河村子どもくらし支援担当係長)子どもコーディネーターは学校を離れた地域、児童会館、子ども食堂を巡回する役割を担っているが、学校のスクールソーシャルワーカーや担任教諭、教頭とも情報交換し、互いに見守りをしている。
- ◇子どもコーディネーターの令和9年度目標値が5倍になっているが、支援の子どもを増やしていくのか、それともコーディネーターの数を増やすのか。
- ◆(河村子どもくらし支援担当係長)目標値は5年間の総数であり、単年度の目標値は現状維持となっている。なお、昨年度7名が今年度から8名体制となっている。
- ◇第1次～3次計画までの流れが見えにくく、アンケート結果を踏まえた深い分析が必要ではないか。活動指標について、どのような資源を投入し、どんな活動を行ったのかが説明では見えてこない。SDGs記載するのであれば、各施策との関連性を明確にした方がよいのではないか。

	◇現計画の振り返りに加えて、第1～3次計画の成果や到達点、残る課題などを示し、第4次との違いが見えるといいと思う。 ◇子どもアシストセンターの認知度を上げるためには、年代によって周知方法を変える必要があるのではないと思う。また、相談相手も年代によって変わるので、多くの相談窓口から各々が選べるとよいと思う。 ◇全国学力・学習状況調査では、北海道の自己肯定感はアップしていた。自己肯定感とは自分のことが好きだけでは図るのは難しいと思う。また、行政だけで向上させていくことは難しく、学校との連携や家庭での子育てにおける研修会などがあつたらよいと思う。 ◇資料1P14の基本的な方針の「障がい、疾病、虐待、貧困などにより困難を抱えやすい子ども」の表現について、障がいを抱えるという書き方はしないので、障がいなどの個人の問題と社会の在りようの関係性もあるので、適切な言葉に表現を統一してほしい。 ◇児童養護施設では、月に一度子どもの意見を聞く場を設けており、そういう機会があれば相談しやすいと思う。また、様々な経験を通して、自分に合うもの、やりたいものを見つけることが大事であり、幅広く情報提供することが大事だと思う。さらに、地域社会から、こぼれてしまう家庭・子どもにどう視点を当てていくかが課題だと感じている。 ◇母親のケアは大切であり、母親の心の余裕が子どもの自己肯定感にも影響するので、自己肯定感の向上には母親のケアも大事だと思う。 ◇アシストセンターの認知度の向上では、クイズや体験などを取り入れると広がりやすくなるのではないか。 ◇子ども施策であるが、大人や親への支援も重要なので、両面から支援していくというところを見えるようにしてほしい。若年女性支援など若者の支援事業は始まっているが、子育て環境の充実など、子どもから若者につながる施策を打ち出していった方がよいと思う。 ◇乳児期の経験は大きくなってから影響するので、人格形成に影響のある時期のケアも充実できると良いと思う。 ◇(寺島委員長)子どもの権利委員会以外で子どもの委員が参加している審議会はあるか。子どもの意見表明の観点から拡大するものと考えているが、今後拡充する計画はないのか。 ◆(石堂子どもの権利推進課長)高校生や子どもが参加する審議会は、子どもの権利委員会のみであり、子どもが参加する貴重な委員会である。 こども基本法等でも子ども施策については子どもの意見反映を行うこととなっているので、審議会やキッズコメントなど様々な形で意見を聞き、施策を実行していきたい。
その他	【事務局からの連絡事項】 ・次回、令和6年11月に開催を予定。 ・「(仮称)第5次さっぽろ子ども未来プランの計画案」及びユニバーサル推進室が所管する「(仮称)共生社会推進条例の骨子案に関する報告並びに意見聴取」を予定。 以上